松江城城郭施設の推移について

和田　嘉宥

はじめに

堀尾氏によって慶長16年（1611）に築城された松江城は、京極氏の時代を経て、寛永15年（1638）、松平直政の入封以後は松平氏により維持管理され、明治時代を迎えたが、天守のみ残され、他の城郭施設は全て取り壊されてしまった。今日、松江城にあった天守以外の城郭施設として、どのような建物があったかは、城郭図等を通してしか知る由もないが、本丸・二之丸・三之丸には数多くの城郭施設が造られていた。

断片的ではあるが松江城については『新修島根県史』にも若干述べられている。「松江築城」(注1)では「（前略）本丸・二の丸の地ならし工事を完成したが、以上は初年度の工事である。」、「第二年度に本丸の石垣工事、天守閣の土台石垣および内壕工事に着手し、天守台を同年中に完成した。」、「第三年度は天守の建造、二の丸の坂口・大手口の枡形・大手口の濠の石垣・三の丸御殿の建築に着手、翌四年度には天守および三の丸御殿が竣工し、塁濠もまた完成したのである。」などと記されている。そして、「吉晴はこの年、築城工事のほぼ成るのを見て、六月十七日松江城内において没した。ときに六十九歳。これがため松江築城工事は、これをもって一応終了した。したがって見方によっては松江城は未完成の城とも考えられる。」と、松江城の築城は吉晴の逝去に伴い、ひとまず終了したと記し、この時点で、城郭全体は未完成だったとしている。また、「松江城の構造」(注2)では「このように竣工した松江城は、東西二町五七間二尺五寸、南北四町五六間一尺の規模で、城内は丘陵部と平地部とにわかれる。丘陵部が軍事的に重要な曲輪で、この丘陵の中央最高所に本丸、その東（南の間違か）に一段低く二の丸があり、囲んで水濠がある。（中略）この（天守）ほか本丸には諸櫓があって、望楼、防禦の拠点となり、平時には武具の倉庫として利用されている。」、「二の丸は東・西の二段に分かれ、西側が一段高く、松平氏二代藩主綱隆のころまでは藩主が居住したところである。その西半には御書院・月見御殿・長局などがあり、東半には御広間があった。御書院は藩主が政務を執るところで、御上段の間・上の間・縁通りなどがあり、その後藩主が三の丸に居住するにおよんで軍用方御役所が置かれた。長局は御女中の居住したところであり、大広間は公的な用務に使用されたものと思われる。現在二の丸はすべて取り払われ、旧御書院跡には松江神社、長局跡には同社務所、月見御殿の跡には興雲閣が設けられている。」とあり、そして「三の丸は堀尾忠晴の代に築城されたもので、その後京極氏により修築されて完成したといわれている。東西一町一一間（128m）南北一町二間（111m）、やや長方形をなし、四周に石垣を築き水濠をめぐらしている。東側を大手とし、三の丸表門があり、北・西・南には廊下橋があって、それぞれ二の丸・お花畑・御鷹部屋へ通じていた。郭内には総建坪一、四一七坪におよぶ広大な建造物があり、三代綱近以降、歴代藩主の住居したところである。三の丸の建造物は明治８年（1875）入札払下げられ、現在は島根県庁舎の敷地となっている。」とも記されている。

以上は、松江城の築城とその後の推移をおおまかに伝えているものである。では松江城の城郭施設は、具体的に何時頃、どのように造営・整備され、また維持されてきたのだろうか。

本稿では、松江城がどのような経緯を辿ってきたか、松江城城郭施設が造られ、時を経て修復され、そしてどのように建て替えたりしてきたかを、関連史料を通して確認し、考察を加えてみたい。

１．天守の創建について

松江城天守は、「雲陽大数録」(注３)に「同（慶長）十二歳丁未ヨリ普請始リ、同十六才辛亥マテ五年ノ間ニ城成就セリ、是今ノ亀田山ナリ」、また「出雲私史」にも「(慶長）十六年内城及天守閣成。地曰亀田山城。曰千鳥城。皆依旧地名也」とあり、慶長16年（1611）に完成したとされている。これを具体的に記す史料としては、早く、城戸久博士が昭和12年（1937）に天守４階で『慶長十六　暦　梵字　奉読誦如意珠経長栄処　正月吉詳日　欽言』(祈祷札１）とあるものなど二枚の祈祷札を確認されていた。(注４)この祈祷札は、その後、所在がわからなくなっていたが、昨年の春、松江市史料編纂室の調査によって松江神社に納められていることが分り、その解読作業が行われ、今一枚には「慶長拾六年　奉祈　大山寺　梵字　奉転読大般若経百部武運長久処　正月吉祥□　敬□」(祈祷札２）と記されていることが確認された。(注５)

これら祈祷札が天守にあったことを具体的に記す史料として、ここでは「御城内惣間数」(注６)を上げておく。この史料は本誌で翻刻している。(注７)奥書に続く貼紙に「御天守四重目并塩蔵ニ大般若札ニ慶長十六年辛亥ト有て関原御陣ヨリ十三年目御城成就御祈祷札と見ル天明七未年迄凡百七拾七年ニ成ル」とあり、祈祷札が天守４階（あるいは塩蔵）にあったことを具体的に伝える史料であるが、この文面から、祈祷札が天守の成就、すなわち完成を祈願して行われた御祈祷に際して作成されたものであることがはっきりしてくる。

祈祷札には「慶長十六年　正月」とあるところから、御祈祷の祈願は正月に行われているのがわかるが、このことから、天守は前年、すなわち慶長15年（1610）の暮れにはすでに完成していたと推察できる。

「松江城は未完成の城」とも言われているが、当時既に藩主となった三之助が元服して山城守忠晴となるのは慶長16年（1611）の３月11日のことであり、そして、忠晴の祖父吉晴は同年６月17日に亡くなる。こうした堀尾家の事情が、慶長15年中に天守だけは完成させ、翌16年の正月に成就の祈願をしなければならない理由となっていたものかもしれない。

２．記述史料を通してみる松江城城郭施設の推移

松江城に関する記述史料を管見する限り集めて作成したのが「松江城城郭施設関連年表」(表１）である。これにより城郭施設の推移について述べてみたい（○数字は年表に付した記号と合致する)。

堀尾氏の時代、松江城の築城は慶長12年（1607）に始まり①、本丸二之丸がほぼ出来上がったのは慶長15年（1610)、この年に堀尾吉晴と忠晴は松江城に移り、天守を完成させて、翌16年正月に成就の祈祷を行っている。しかし、この年の６月17日に吉晴は亡くなり、松江城の整備は中途のまま月日がながれる。そして、前述したように、三之丸の整備は忠晴の代に行われている。しかし、忠晴は寛永６年（1629）９月20日に逝去し、堀尾家は断絶し、三之丸の整備は次の藩主・京極忠高によって引き継がれたと考えられている。しかし忠高は寛永14年（1637）に逝去し、後を継いだ養子の高次は龍野に移される。こうして、三之丸の整備は十分に行われないまま、松江藩は京極氏から松平氏の治世となる。

寛永15年（1638）に松平直政が松江藩主になるが、『御作事所御役人帳』(注８)を見ると、御作事所では「城普請」が年々増え(注９)ている。その理由はよくわからないが、城普請の増員は城郭施設の整備に伴うものだったかと思われる。

二代綱隆から三代綱近と藩主が変わるころ『(竹内右兵衛書つけ)』(注10)に「城郭の部」が記録されている。この時には、本丸にあった「御薬蔵」や「家」(藩主の住居か）はすでに取り壊されており、二

之丸の下台所とそれにつながる廊下部分は作事小屋とその物置になっている。最終章「新御屋敷之内」の記述は「南ノ表長屋三間梁ニ拾五間未申ヨリ辰未ニ当リ棟立」の一項目で終っている。「新御屋敷」は「上御殿」と考えられるが、当時、「上御殿」は建築中だったのかもしれない。また、『(竹内右兵衛書つけ)』には二之丸下ノ段には「荻田表長ヤ」の記述があり、荻田居所が既にあったことがわかる。

三之丸については、元禄３年（1690）の「三丸新御寝間出来」②が初出で、その２年後に「万姫様御殿」や「奥御殿」の建築③が行われている。

「上御殿」について見ると、元禄９年（1696）頃に幸松丸（後の４代吉透）の新宅④が出来ているが、これは享保18年（1733）の火災で類焼し、以後、ここに何か建てられたという記録は見えない。

三之丸では「御仕立所御座間」（享保７年）⑤、「御唐門」（同９年）⑥、「御仕立所納戸、御湯殿」（同11年）⑦、「御仕立所御部屋」（同14年）⑧、「御二階座敷」（同16年）⑨などの建築がほぼ年次的に行われている。これらの記録から三之丸に本格的な住居関連の施設が整えられるのは５代宣維の代と見なしてよいと思われる。(注11)

その後の経緯を見ると、６代宗衍の代の終盤になって、「御仕立所御住居替」（宝暦５年）⑩、「三ノ丸奥御殿御普請」（同９年）⑪、「奥御殿・外回り修復」（明和２年）⑫などが行われ、７代治郷の代になって、「屋根修理」（明和５年）⑬が行われ、修復も一段落したかと思われるが、その後も修復・改築等は、「奥新座敷の建築」（安永３年）⑭、「御寝所建継」（同６年）⑮、「御書院修復」（同年）⑯、「御仕立所長局の普請」（天明９年頃）⑰、「奥御殿建直し」（寛政元～２年）⑱、若殿様（後の衍親）御殿の新築（同４年）⑲、大奥御殿の普請（同５年）⑳、御仕立所の建直し（同12年頃）㉑と継続的に続いていたことが確認できる。

その後、８代斉恒の代になると文化７年頃に三之丸の大奥御殿の修理㉒が行われているが、これ以後、９代斉斎の時には御花畑の御茶屋が取り壊され、10代定安の代には御花畑に観山御殿が建てられたりしている。斉斎、定安の代に、本丸・二之丸・三之丸では記録すべき修理等は行われていなかったようである。

天守の修理について見てみよう。

『藩祖御事蹟』には「竹内有兵衛（中略）天主の御修復を命ぜられしかば、有兵衛先づ天主の雛形を作りて御修復に取懸り、遂に思う如くに功を成せり」ⓐとあるが、これ以外には直政の時代の修理記録は見出せない。

『重要文化財松江城天守修理工事報告書』にある墨書等で一番古いものは延宝４年（1676）の「延宝四年卯月□□　大工□左衛門」ⓑである。また、元禄13年（1700）には「北側張出建破風」（三層目の入母屋破風か）の懸魚六葉ⓒが取り替えられていると思われる。

「列士録　斎田彦四郎」に「享保三年（1718）六月十八日　御天守小形拵差上付而為御褒美二百疋被下之」ⓓとあるが、天守の模型が、この頃、御大工斎田彦四郎によっても作られている。

また、『天隆院年譜』の元文３年（1738）には「是日告ルニ月相府似ス雲藩松江城　天守遂テ年致シ損スル五層皆朽ルニ故斬修之」ⓔとあるが、この頃から天守の本格な修復が始まったようにも思われる。

この後では、「元文四年四月廿日　檜皮中満といふ□□□」ⓕ、「(表）寛保元年酉　（裏）檜皮　権四郎　酉五月廿日」ⓖ、「寛保三年亥四月廿九日　大工定次郎」ⓗなどの墨書が天守三重、四重の屋根にあったことがわかっているが、「列士録　竹内三郎左衛門」を見ると「(寛保３年８月18日）御天守御修復御用出精付而為御褒美御帷子一銀五枚被下之」ⓘとある。これらのことから、元文３年（1738）頃から始まった天守の修復は寛保３年（1743）頃にはひとまず終了したと見なしてよいだろう。以後の修理を見ると、江戸時代には文化12年（1815）の五重東棟の修理ⓙが確認されているだけで、明治を迎えることになる。

３．城郭図を通してみる松江城の変化

ここでは「堀尾期松江城下町絵図」（以下「堀尾図」と略す）（島根大学所蔵）、「寛永年間松江城家敷町之図」（以下「京極図」と略す）（丸亀市立資料館所蔵）、「出雲国松江城下図」（国文学研究史料館所蔵）、「御城内惣絵図」（同左）を取り上げる。

堀尾忠晴が藩主であった元和６年（1620）から寛永10年（1633）の間に作成されたと推定されている「堀尾図」は本丸・二之丸・三之丸が大きめに誇張して描かれている。建物は位置関係が確認できる程度に大雑把な描き方であり、この図によって城郭施設を正確に把握することは難しいが、本丸・二之丸・三之丸には相当数の建物があったことがおおよそ確認できる。三之丸に架かる橋には屋根を付して描かれているので廊下橋は堀尾期に既に架かっていたことが推察できる。

「京極図」は「堀尾図」と大きさや構図が酷似しており、堀尾図を参照に描かれた松江城下図(注12)で、「堀尾図」同様に本丸・二之丸部分が大きく描かれ、三之丸はやや縮小されている。ただ、三の丸に架かる橋は二之丸につながる廊下橋といわゆる助次橋は描かれているものの、「堀尾図」にはっきりと描かれている御花畑と御鷹部屋につながる御廊下橋は描かれておらず、また三之丸の表門も描かれていない。このような書き落としがあるところをみると、城郭部に限ってみると正確さは「堀尾図」より少し劣るように思われる。本図の作成年代ははっきりしないが、城郭部の一画に「京極刑部」と記されているケ所がある。京極刑部は京極忠高の末期養子である。このことから、本図は寛永14年（1637）頃に描かれたものと見なしてよさそうである。

「出雲国松江城下図」は幕府に届けるために描かれたいわゆる「正保城絵図」(注13)の一つである。本丸・二之丸がやや大きめに描かれているが、前記二つの図より図面の精度はよくなっている。濠には長さや深さが、石垣にも長さや高さが記され、天守や櫓、門、太門などの建物は大半が屋根の形がわかるように描写的に描かれており、その形状もおおよそわかる。しかし、天守は一層目と二層目の屋根に千鳥破風が描かれているなど不正確な描写となっている。また、本丸・二之丸・三之丸の内には井戸が描かれ、その位置はわかるが、諸建物は何一つ描かれていない。

「御城内惣絵図」は１間四方を一目盛りとする方眼紙に城郭全体が描かれており、本丸・二之丸・三之丸では、どのような位置に城郭施設があったかよくわかる。よく見ると、建物や石垣の位置や形態は「松江城縄張図」(注14)や「御三丸御指図」(注15)とよく似ており、本図はこれら実測図をベースにして描かれたものと推察できる。また、多くの建物には屋根の形態もわかりやすく描かれている。

以上の図面４点を元図にし、内堀内部の城郭部を上書きしたのが**図１・２・３・４**である。これらの図面４点を通して松江城城郭施設の推移を検討してみたい。

図１で松江城周辺を見ると、松江城は本丸・二之丸・三之丸を水濠に囲まれ、その西に「花はた」（御花畑）がある。本丸には天守や櫓以外に建物も表示されている。これらは『(竹内右兵衛書つけ)』にある薬蔵、家（藩主の居所か？）、台所などにあたると思われる。二之丸にも櫓の外に、おおくの建物表示がなされている。これらも『(竹内右兵衛書つけ)』にある長局、式台、御広間、下台所、御書院、上台所、御広式、御ふろなどと見なしてよいだろう。二之丸下ノ段の南御門、その前の枡形、柵門そして東御門などが確認できる。本丸周辺にも幾つもの区画が見られるが、建物かどうかははっきりしない。敷地としての区画のようにも思われる。三之丸にも多くの建物が表示されている。東南部の表示は玄関、御広間、御書院など表向きの諸施設であると思われる。とすると、その背後の表示は台所や藩主の居住空間とみなしてよいだろう。

堀尾氏の松江城は未完のまま終ったと言われているが、この図をみる限り、今日、我々が知る松江城の整備は、堀尾氏の時代にほぼ完了していたようにも思える。なお、三之丸について『新修島根県史』は「堀尾忠晴の代に築城されたもの」と記しているが、「堀尾古記」にある「（寛永）六、己巳　御屋敷御作事、二月廿三日御作事初、閏二月六日ニ鋤始」は、三之丸の築城を指しているのかもしれない。とすると、「堀尾図」は寛永６年（1629）頃の松江城の全体像を描いていることになる。

図２で京極期の松江城の推移を考察してみたい。前述したように「京極図」には不正確な部分もあり、京極時代の松江城の城郭施設の全容を全面的に信頼することは難しいが、『新修島根県史』には「（松江城は）京極氏により修造（補修）された」とあり、『京極忠高の出雲国・松江』にも「三ノ丸は（京極）忠高が修補を行ったといわれていますが、事実の可能性は高いと思われます」とある。**図１**と**図２**を対比することによって、堀尾期と京極期の松江城の相違がわずかに見えている。

本丸は堀尾期とほとんど変わっていない。二之丸には西ノ門や三ノ門が描かれていないが、その構成は、基本的には変わっていないと見なした方がよさそうである。本丸北の後曲輪には細長い線が２本、平行に描かれているが、東御門から北西の中原口に通じる道は京極期に整えられたかと思われる。また、後の「上御殿」と思しき場所は四角に区画されて「京極刑部」と記されている。この京極刑部は忠高の末期養子・京極刑部高和である。とすると、寛永14年（1637）頃、この一画は京極刑部高和の居所ということになる。

三之丸では、南東部にある玄関、御広間、御書院など表向きの施設等について、相違はあまり見られないが、北西部分では**図１**と描写がやや異なっている。この部分は、後の藩主の私的な生活空間になる場所で、奥御殿、御風呂の外に女中部屋、長局などが建ち並ぶことになるが、当時、すでにこのような居住施設があり、その後、修造（補修）が行われたのだろうか。なお、本図には東側の表門が描かれていない。また、前述したように二本の廊下橋も描かれていない。忠高による三之丸の「修造（補修）」とは、表門の建替え、廊下橋の付け替えなどのことを暗に表しているのかもしれない。

図３を見ると、本丸・二之丸・三之丸は、石垣上に櫓や太門、塀があり各曲輪を取りまいている。その内側には本丸に天守は描写されているが、井戸以外に建物等の施設は何も描かれていない。これは、全国の「正保城絵図」に共通して見られるが、幕府による各藩の城郭規制は、天守の他は、石垣やその上に建つ櫓等に留まり、その内側の諸城郭施設の修造等については届け出は必要としなかったのだろうか。

天守は前述したように実際とは異なり、誇張されて描かれている。その他の櫓等は全て入母屋屋根で、天守の脇にある乾櫓、南御門、北御門には天守と同様に屋根に鴟尾が上がっている。これも実際とは少し異なる。

二之丸下ノ段には、全体を取りまくように南・東・北の三方に長屋が描かれている。ここに米蔵二棟が建っていたことは『松江城縄張図』等で確認できるが、ここに米蔵が建つのは松平氏の治世になってからなのだろうか。また、後曲輪の「京極刑部」の屋敷だったと思われる場所には東側に門と塀が描かれて「侍屋敷」と記されている。誰の屋敷かはわからないが、正保年間、ここは家臣の屋敷になっていたと思われる。また、その北方の一画には「宮」と記されているが、この場所は「城内稲荷神社」にあたる。この神社は松平直政入府以後に創建されたと見なしてよいだろう。なお、石垣について見ると、**図１**、**図２**と異なるのは、本丸の西側に石垣がさらに二筋描かれている。とすると、これら、石垣の増設は寛永16年以降かもしれない。

なお、**図３**には各所に井戸が六つ描かれている。これらの井戸の多くは築城時、すでに造られたもの

と考えてよいと思われる。

図４は、松平氏の治世に移ってからおよそ80年後の姿である。３代綱近治世の代には城郭の調査や実測が詳しく行われ、『(竹内右兵衛書つけ)』に「城郭ノ部」が記され、『御城内縄張図』などの実測図が作成されている。これらの資料をベースにして描かれたのが「御城内惣絵図」である。１間升目の方眼に石垣、建物などが全て描かれている。城郭図としては先の３図に比べて、比較にならないほど正確であるので、これによって享保年間の松江城本丸・二之丸・三之丸の全容がほぼ確認できる。

本丸は天守の他、四周の櫓や太門は変わっていないが、内側の「薬蔵」や「家」はなく、「台所」だけが描かれている。

二之丸を見ると、下の段には式台、広間、下台所（御作事所）がある。上の段には御書院、月見櫓、土蔵、そして長局の建物が残っているが、上台所や御風呂は取り壊されている。このことから、当時、二之丸は藩主の住居としてはあまり使用されておらず、藩主の居住は三之丸に移っていることが確認できる。

二之丸下ノ段では、南御門を入った所にまず天守鍵預の居宅があり、その背後に米蔵２棟が見える。そして北側には荻田長屋がある。その内側にある建物は、後になって建てられる建物（米蔵の内側にある細長い建物は後の建築）である。本丸と二之丸を取り囲む後曲輪にある御茶屋や番所、そして荻田長屋の内側の「荻田居所」となっていた建物は原図には貼紙が付されているが、これらの施設は、「御城内惣絵図」ができた後に取り壊されていることがわかる。

上御殿については、門や塀の位置しか描かれていないので、どのような建物配置になっていたのかは確認できない。

三之丸は、三之丸自体の形は正確で、表門や長屋、土蔵もはっきりと描かれている。内部の諸施設について名称等は記されていないが、「三ノ御丸指図」と建物配置がよく似ている。「三ノ御丸指図」により、当時、三之丸は玄関、広間、書院、対面所、下台所、上台所、対面所など公的な建物とともに、藩主の御居間・寝所など、私的な建物からなっていることが確認できる。また、御居間・寝所の前は、門で囲まれた庭園で池も穿かれていたこともわかる。北西部は女中部屋、長局、奥御殿など奥向きの建物からなっていたと思われる。

おわりに

以上、松江城城郭施設の推移を松江城に関する記録並びに城下図並びに城郭図によって見てきた。寛永12年に開始された松江城の建設は慶長16年（1611）正月に天守竣工の祈祷が行われて、ひとまず終了したことになっているが、吉晴逝去後、堀尾忠晴の代に三之丸の建設などが続けられ、京極氏に引き継がれて行われたのは間違いないと思われる。一方、京極氏の時代までは藩主の住居は二之丸が中心で、養子高和の住居も本丸の北西部の高所に築かれていたと思われる。松平氏の治世になって藩主の居所は二之丸から三之丸に移ると思われているが、それが具体的に何頃かは確定できない。３代綱近頃からと想定されるが、『雲国侯年譜』には綱隆が寛文年間に三之丸に住んでいたとの記録(注16)もあり、藩主の住居が二之丸から三之丸に移る時期については、なお、検討を要する。

「御城内惣絵図面」と類似する建物の間取りが描かれている図面に「三ノ御丸指図」があるが、この図には建物に「御居間」、「御寝間」、「御持仏」等の名称が記されているので、これらの図面が作成された頃には、既に三之丸が藩主の住居になっていたと考えられる。

「三ノ御丸指図」で見る「御式台」、「御広間」、「下御台所」と「御書院」、「上御台所」との配置構成は、「松江城縄張図」にある「下御台所」、「御広間」と「御書院」、「上台所」の配置構成と非常によく似て

いる。三之丸の主要な施設は早い時期に二之丸御殿に倣って三之丸に建てられていたと思われるが、藩主の住居部分や奥の部分の築造は、史料の記録により、３代綱近の代から始まり、以後、順次、増改築が繰り返し行われていたことがわかった。三之丸を記した図面には「三ノ御丸指図」の外に「三ノ丸御殿御間取図」、「安政三辰改　三丸惣絵図面」などもあるので、３代綱近以降の三之丸の推移については改めて検証してみたい。

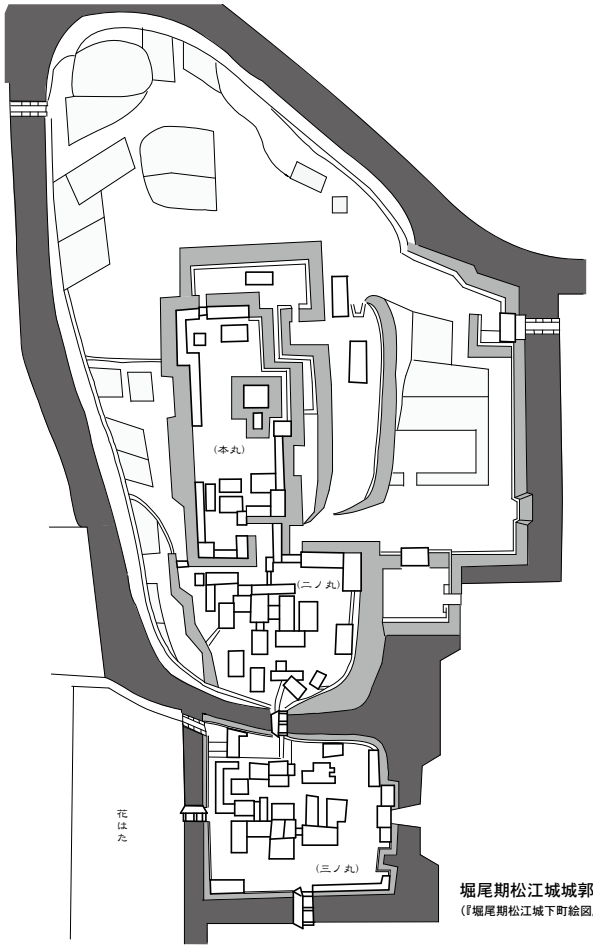
慶長16年に完成した天守については、『藩祖御事蹟』に竹内有兵衛が直政の命によって天守の修復を行ったとあるが、具体的な修復の内容はわかっていない。記録による修復の初見は元禄13年（1700）の「天守破風の部分修理」であるが、天守の大々的な修復は宗衍の代、元文から寛保にかけて行われたとみなしてよいだろう。この時の修復で３階以上の柱や梁などがかなり大がかりに替えられたと思われる。

（注１）島根県、「堀尾氏の松江築城」、『新修島根県史　通史編１』、昭和43年。
（注２）同上
（注３）島根県、「雲陽大数録（宝暦）」、『新修島根県　史料編２』、昭和40年
（注４）城戸久、「松江城天守」、『仏教芸術60　特集・山陰の美術』、昭和41年
（注５）「祈祷札」については本書別稿「松江城創建に関わる祈祷札について」等で詳しく解説されている。
（注６）国文学研究資料館所蔵。同館には松平家より寄贈された『出雲国松江松平家文書』204点が所蔵されているが、本史料はその内の一つ。
（注７）拙稿「翻刻　御城内惣間数」、『松江城研究２』（本書）、平成25年３月。
（注８）野津隆氏所蔵。本書については拙稿『松江藩御作事所と御大工に関する研究』（私家版、2002年）で、その全容を翻刻し、論じている。
（注９）『御作事所御役人帳』を見ると城普請は、寛永16年に２人だったのが、同17年に８人、正保５年に９人、慶安２年に11人、同４年に12人、万治２年に13人、寛文６年に16人、延宝９年に17人、貞享４年に18人、同４年に19人、同５年に21人と増え、以後の増減はない。
（注10）拙稿「翻刻　『（竹内右兵衛書つけ）』」、『松江城研究１』、平成24年３月。
（注11）ただ、『雲州松平家　家伝年譜』を見ると、「綱隆年譜」に「（寛文）九年（中略）其身ノ居住所ハモト三丸ニアリタルヲ移リテ二丸ニ居リ（後略）」とある。「堀尾期城郭図」及び「京極期城郭図」でも三ノ丸には、見方によっては、書院・広間等、外向きの施設共に藩主の居間をはじめとする内向きの施設もあるように思われる。三之丸御殿が藩主の住居になっていた時期については、三之丸の整備とは別の視点で検証しなければならないだろう。
（注12）西島太郎「『堀尾期松江城下絵図』の制作工程と伝来　－角筆の使用痕跡にみる－」（『日本歴史　755号』2011年４月）に、「京極図」が「堀尾図」を参照にして描かれたものであることが具体的に記されている。
（注13）正保元年に、江戸幕府は、諸藩に国絵図・郷帳の提出を命ずるとともに、城絵図をも差し出させた。これを称して「正保城絵図」と言われているが、内閣文庫には63点が伝わっている。諸曲輪の縄張（配置・規模、石垣や濠など）については詳細な報告が求められていたのに対して、城内の建物に関しては城ごとの精粗の差が大きく、政庁や藩主居館など日常的用向きの建物に関しては、略されている場合が多い。
（注14）松江歴史館所蔵。制作年代ははっきりしないが、「天守鍵預居宅」に「神谷勘左衛門」と記されているところから、神谷勘左衛門が天守鍵預を勤めていた元禄11年（1698）～宝永７年（1710）に作成されたものであることがわかる。
（注15）国文学研究所所蔵の「出雲国松江松平文庫」の一つ。制作年代ははっきりしないが、制作手法は『松江城縄張図』と同じであるので、同時代に作成されたものと思われる。
（注16）『雲国侯年譜』（島根県立図書館所蔵）の綱隆侯の条には「（寛文）九年乙酉正月十四日綱隆諸士ヲ率テ意宇郡山代村ノ茶臼山ニ狩リヲ催セリ　綱隆ハ常ニ治ニ乱ヲ忘レサルノ戒ヲ守リ漸ク昇平ニ属スルニ従　武士ノ游楕ニ過コシテ遂ニ浮華軟弱ニ流レ一旦事アラン時一人ノ物ノ用ニ立ツヘキ者モ無キニ於テ実ニ耻ツヘキノ至ナリト常ニ深ク之ヲ憂ヒ其身ノ居住所ハモト三丸ニアリタルヲ移リテ二丸ニ居リ大木三左衛門信峯ナトイヘル者ヲ抜擢シ内命ヲ以テ諸国武者修行トシテ廻歴セシメ」と、住居を三之丸から二之丸に替えたことが記されている。

松江城城郭施設関連年表（「記号」は本文の符号と同一でⓐ～①は天守、①～㉒は城郭施設である。「出展」で『重要文化財松江城修理報告書』は『修理報告書』と記載）

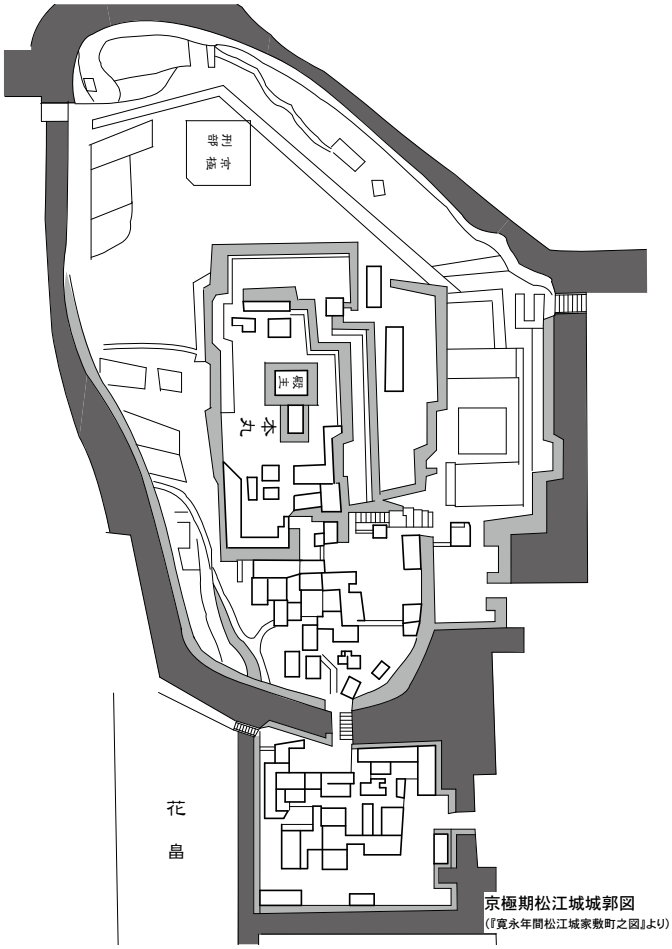
西暦	和暦	月	日	事　項	引　用	記号	出　典
1600	慶長 5	11		堀尾吉晴、出雲国主	堀尾帯刀吉晴、関ヶ原ノ戦功ニヨッテ出雲国ヲ賜フ		『雲陽大数録』
1607	12			この頃、松江城着工？	同（慶長）十二歳丁未ヨリ普請始リ、同十六才辛亥マテ五年ノ間ニ城成就セリ、是今ノ亀田山ナリ	①	『雲陽大数録』
1610	15			堀尾氏（吉晴）、松江に移る	同拾五年、御入部、鉄穴御停止（以下略）		『鉄山旧記』
1611	16	1		天守竣工の祈祷が行われる	慶長拾六年辛亥奉祈　大山寺　奉轉読大般若経六百部武運長久処　正月吉祥（日）　敬（白）		『松江城祈祷札』
1629	寛永 6			この年より三の丸御殿の建築が始まる	御屋敷御作事、二月廿三日御作事初、閏二月十六日ニ鉄始		『堀尾古記』
		9	20	堀尾忠晴没す、堀尾家断絶	山城様ハ廿日ニ御果被成候（中略）十一月三日ニ堀より内ノ侍共家ヲあけ申候		『堀尾古記』
1634	11			京極忠高、松江藩主	閏七月六日出雲隠岐二国を賜ひ、二十四万石を領し、翌八月十七日に松江城に入る		『松江市誌』
1637	14	6	16	京極忠高逝去、京極家移封	（京極忠高）六月十二日於江戸御逝去		『京極御系図』
1638	15	2	11	松平直政（初代）、松江藩主			『松江藩松平氏系譜』
				この頃、松江城天守修復か	竹内有兵衛（中略）天主の御修復を命ぜられしかば（中略）天主の雛形を作りて御修復に取懸り、遂に思ふ如くに成功を成せり	ⓐ	『藩祖御事蹟』
1666	寛文 6	4		綱隆（2代）、家督相続			『松江藩松平氏系譜』
1671	11				松下源蔵／天守鍵預（元禄七年（1697）五月十二日死去）		『列士録』
1674	延宝 2	9		別の廓（後の「上御殿」）の石垣修理を申し出る	右之通絵図書付之所石垣築直申度奉存候以上　別の郭、今ノ上御殿ト云フ		『延宝二年絵図』
1675	3	3		綱近（3代）、家督相続			『松江藩松平氏系譜』
1676	4			天守附櫓破風の修理	延宝四年卯月□□　大工□左衛門	ⓑ	『修理報告書』
1679	7			この年、二ノ丸下ノ段に荻田屋敷できる	荻田屋鋪出来		『御作事所御役人帳』
1690	元禄 3			三ノ丸に新御寝間できる	三丸新御寝間出来		『御作事所御役人帳』
1692	5				奥御姫様御殿共三百坪余出来	②	『御作事所御役人帳』
				この頃、三ノ丸奥御殿、万姫様御殿できる	上田傅五左衛門／万姫様御殿御普請元〆役被仰付、同八月三丸御普請御用被仰付（以下略）	③	『列士録』
1694	7			後山御茶屋（外廓）並びに田中御茶屋（御花畑）できる	後山御茶屋出来　田中御茶屋出来　天倫寺御霊屋出来　初		『御作事所御役人帳』
1696	9	2	29	この年、上御殿（新御殿）できる	幸松丸（4代吉透）、清寿院を娶り、新宅を後山（上御殿・新御殿）を営み、之に別居せられたり。	④	『雲藩職制』
1697	10			三ノ丸北の石垣修理	三丸御門北多門石垣崩れ直し		『御作事所御役人帳』
1698	11	7	25	この頃、「御城内縄張図」作成	神谷勘左衛門／天守鍵預（宝永7年（1710）、天守鍵預御免）		『列士録』
1700	13			天守の部分的修理	□元禄十三□辰四月　大工伝七　同喜平次　作（懸魚の六葉の墨書）	ⓒ	『修理工事報告書』
1704	17			上御殿の新御屋敷でき、外記（綱近）移る	養法院様（2代綱隆側室、4代吉透の母）三丸へ御移リ被遊　新御屋鋪御普請出来　御隠居外記様御移		『御作事所御役人帳』
1704	宝永 1	5		吉透（4代）、家督相続			『松江藩松平氏系譜』
				外記様帰松、北ノ丸（新御殿）で養生	外記（綱近）、8月9日に松江に帰着北ノ丸（俗に新御殿と云った）に病を養った。同6年11月15日逝去		『松江市誌』
1705	2	10		宣維（5代）、家督相続			『松江藩松平氏系譜』
1706	3			この年、新御殿の普請なり、新御屋敷へ養法院様移る	新御殿御普請出来　新御屋鋪へ養法院様御移リ		『御作事所御役人帳』
1718	享保 3	6	18	この頃、模型（雛形）作成か	斎田彦四郎／御天守小形拵差上付而為御褒美二百疋被下之	ⓓ	『列士録』
1719	4	7	12	この頃、「御城内惣絵図」作成か	松田七左衛門（78歳）／天守鍵預ー享保五年（1720）二月四日天守鍵預御免		『列士録』
1720	5				斎田彦四郎／（3月）御城内分限絵図被仰付出来差上付而同八月御褒美二百疋被下之		『列士録』
1722	7			三ノ丸に御仕立所御座間できる	御仕立所御座間出来	⑤	『御作事所御役人帳』
1724	9			三ノ丸に唐門できる	三丸御唐門出来	⑥	『御作事所御役人帳』
1726	11			三ノ丸に御仕立所納戸、御湯殿できる	三丸御仕立所御納戸、御湯殿出来	⑦	『御作事所御役人帳』
1729	14			三ノ丸に御仕立所御部屋できる	御仕立所御部屋出来	⑧	『御作事所御役人帳』
1731	16			三ノ丸に二階座敷できる	三丸二階御座敷出来	⑨	『御作事所御役人帳』
	16	10		宗衍（6代）、家督相続			『松江藩松平氏系譜』
1733	18			この年、百姓大火により上御殿、稲荷神社等焼失	松江大火入城　火元末次百姓町講武屋徳兵衛借家　北丸新館鎮守八幡社等類失		『雲国侯年譜』
1738	元文 3	3	11	この頃、天守の修理	是日告ルニ月相府以ス雲藩松江城　天守遂テ年致シ損スル五層皆朽ルニ故斬修之	ⓔ	『天隆院年譜』
1739	4			天守四重屋根の修理	（裏）元文四年四月廿日　檜皮中万といふ□（四重木片の墨書）	ⓕ	『修理工事報告書』

西暦	和暦	月	日	事　項	引　用	記号	出　典
1741	寛保 1			天守三重屋根の修理	(表)寛保元年酉　(裏)檜皮　権四郎　酉五月廿日(三重屋根の曾木)	ⓖ	『修理工事報告書』
1743	3			天守四重屋根の修理	寛保三年亥四月廿九日　大工定次郎(四重屋根の曾木)	ⓗ	『修理工事報告書』
		8	18	この頃、天守の修復はひとまず終る	竹内三郎左衛門／(8月18日)御天守御修復御用出精付而為御褒美御帷子一銀五枚被下之	①	『列士録』
1744	延享 1			この頃、城内稲荷社造替	竹内三郎左衛門／(11月26日)御城内稲荷若宮八幡社御造営御用出精相勤		『列士録』
1750	寛延 3			この年、二ノ丸の上台所が取毀される	上台所(中略)此分寛延三午御議定ニ而崩ス		『御城内惣間数』
1752	宝暦 2			この年、二ノ丸役屋敷(御作事所か)の建直し	二丸役屋布建直シ		『御作事所御役人帳』
1755	5			きりきり門迄の塀修復	東側不残建直し南北路ニ成ル		『御城内惣間数』
		6		この年、三ノ丸御仕立所普請	斉田彦吉／三ノ丸御仕立所御住居替御用受口被仰付、六月御普請相済付而御褒美銀三両被下之	⑩	『列士録』
		8		下ノ段の米蔵(南米蔵)修復	(南御蔵)御修復、三拾九間ニ成ル　西ニテ三間縮		『御城内惣間数』
1759	9			三ノ丸奥御殿を普請する	三丸奥御殿御普請　斉田彦吉／(4月)三丸奥御殿御普請受口御場所詰切被仰付(『列士録』)	⑫	『御作事所御役人帳』
1764	14			御作事所会所、建直し	御作事所会所建直シ		『御作事所御役人帳』
1765	明和 2			この年、(三ノ丸)奥御殿・外廻り修復	安藤喜与七／(4月)三丸奥御殿・外廻り御修復御用出精相勤	⑪	『列士録』
				三ノ丸奥御殿二階、取崩す	三丸奥御殿二階崩シ已前之通りニ相成	⑫	『御作事所御役人帳』
1767	4	11		治郷(7代)、家督相続			『松江藩松平氏系譜』
1768	5			三ノ丸御殿の屋根修理が行われる	斉田彦吉／(11月13日)三丸惣屋根御修復別立被仰付、御普請仕方頭取内改兼相相勤旨被仰付	⑬	『列士録』
1769	6			三ノ丸の修復ひとまず終る	斉田彦吉／(略)三丸其の他幾多の御修復所出精相勤め、御褒美金1両		『列士録』
1774	安永 3			御花畑御茶屋、三ノ丸奥新座敷できる	御花畑新御茶屋　三丸奥新座敷　出来　御花畑新御茶屋　但安永四未年新建被仰付	⑭	『御作事所御役人帳』
1776	安永5～6			(三ノ丸)御寝所の建継ぎ始まる	御寝所御建継御入用／193両		『出入挺捷覧』
1777	6			(三ノ丸)御寝所の建継ぎ終る	御寝所御建継　御普請五月出来　渡部喜右衛門相勤ル	⑮	『御作事所御役人帳』
				三ノ丸御書院修復	山門吉四郎／(12月5日)当夏御書院御修復之節一入念配付而三百疋被下之	⑯	『列士録』
1786	天明 6			(三ノ丸)駒次郎(衍親)様御殿取り壊し	三丸駒次郎様御殿御取毀		『御作事所御役人帳』
1787	7			田中御茶屋に継ぎ足し、駒次郎様御殿できる	田中御茶屋継足　駒次郎様御殿ニ相成ル		『御作事所御役人帳』
1788	8			田中御茶屋茶所崩れ建直し、三ノ丸局長屋建直し	田中御茶屋御茶所崩江戸御居間へ建　跡へ代り御茶所有来り之通新出来　三ノ丸長局建直し		『御作事所御役人帳』
1789	9			御花畑の南に駒次郎(衍親)様御殿できる	御花畑南へ駒次郎様御殿建		『御作事所御役人帳』
				この頃、御仕立所長局の普請	御仕立所長局御普請御入用／215両	⑰	『出入挺捷覧』
1789	寛政1～2			この頃、(三ノ丸)奥御殿建直し	奥御殿御建直御入用／399両　斉田彦吉／駒次郎様御部屋御普請御用出精相勤(『列士録』)	⑱	『出入挺捷覧』
1790	2～3			この頃、(三ノ丸)奥御殿建直し	奥御殿建直御入用／226両		『出入挺捷覧』
1792	4			この頃、若殿(斉恒)様御殿並びに新御部屋できる	安藤喜与七／(4月)若殿様御御殿并新御部屋御普請御用出精相勤就相勤為御褒美百疋被下之	⑲	『列士録』
				駒次郎様御殿御修復、若殿様御殿御普請	井川善十郎／(1／23)駒次郎様御殿御修復、(10／23)若殿様御殿御普請		『列士録』
				(御花畑)田中御殿の建替	御花畑之内田中御殿新建御入用／374両		『出入挺捷覧』
1793	5			この頃、(三ノ丸)大奥御殿普請	安藤喜与七／(4月)大奥御普請御用被仰付　(12月)大奥御殿御普請御用出精	⑳	『列士録』
1794	6～7			この頃、御仕立所の住居替え	御仕立所御住居替御入用／221両　三助様此表エ被為入候ニ付入用／409両	㉑	『出入挺捷覧』
1800	12～享和1			この頃、御仕立所の建直し、奥御殿の修復か	御仕立所新建奥御殿御住居替御入用／195両		『出入挺捷覧』
1806	文化 3			斉恒、家督相続			『松江藩松平氏系譜』
1810	7			この頃、大奥御殿御修復か	山門平左衛門／(2月7日)大奥御修復中横目被仰付	㉒	『列士録』
1815	12	6		天守五重東棟の修理	文化十二亥六月十四日　未□文化　谷吉一二(五重東棟木受の木材)		『修理工事報告書』
1822	文政 5	5		斉斎、家督相続		①	『松江藩松平氏系譜』
1830	天保 1			御花畑御茶屋(田中御茶屋？)取壊	「御花畑新御茶屋」取壊(「御花畑新御茶屋(図)」(県図)天保12年制作)		『御花畑新御茶屋(図)』
1840	11～12			この年、御花畑の内、鷹塒できる。	御花畑之内鷹塒且御居間御庭御鷹塒出来入用／484両		『出入挺捷覧』
1853	嘉永 6	9	5	定安、襲封			
1854	嘉永 7			この頃、観山御殿ができる。	安藤只七／(10月12日)観山御殿御普請御用出精就相勤為御褒美銀拾五枚被下之		『列士録』
1864	元治 1			中原口の御門建直し	中原口御門　一間半　元治元子年建直し		『御城内惣間数』


(本丸)
(二ノ丸)
(三ノ丸)
花はた
堀尾期松江城城郭図
(『堀尾期松江城下町絵図』より)

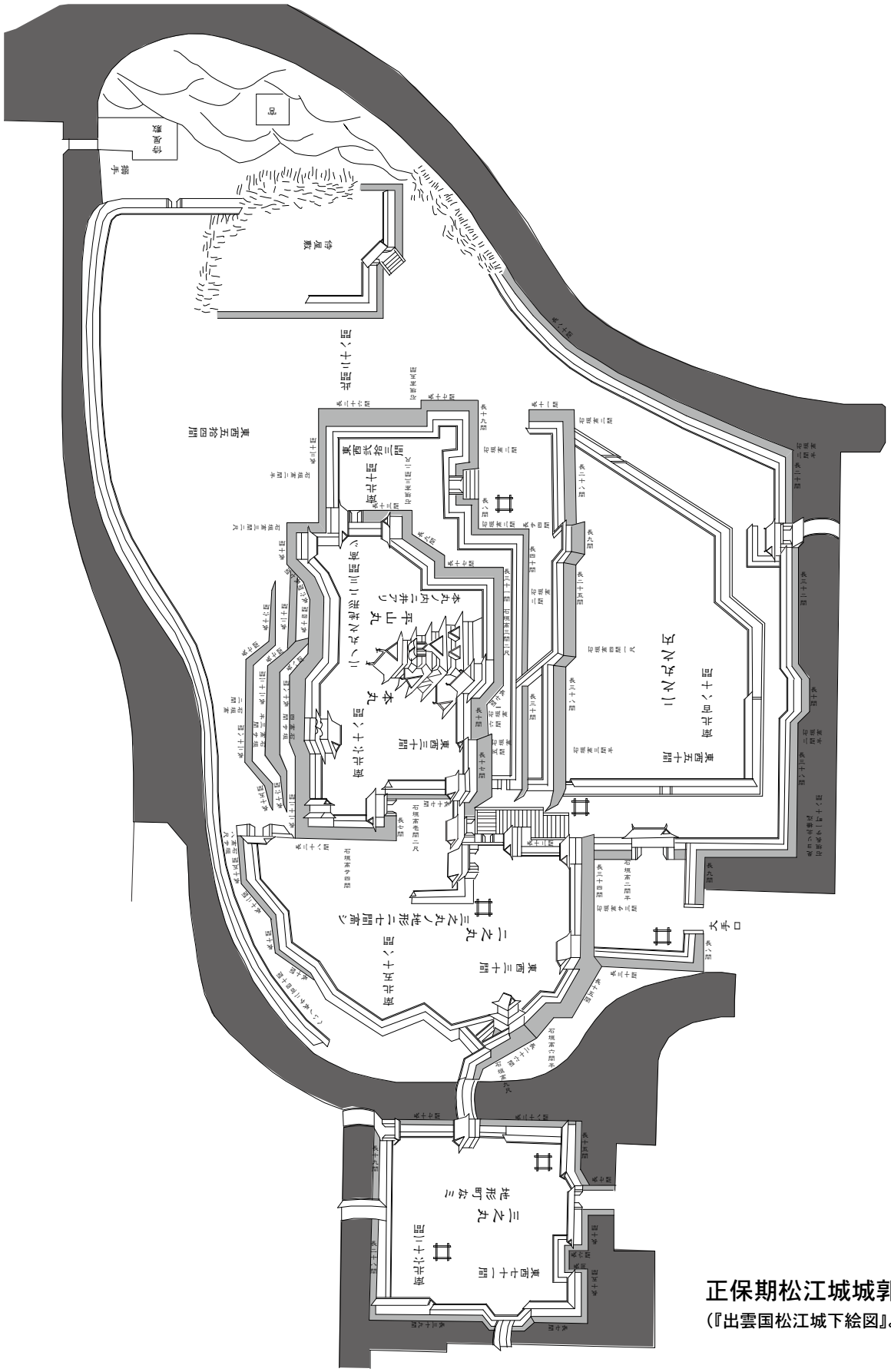
堀尾期

図１


刑部屋敷
御主殿
本丸
花畠
京極期松江城城郭図
(『寛永年間松江城家敷町之図』より)

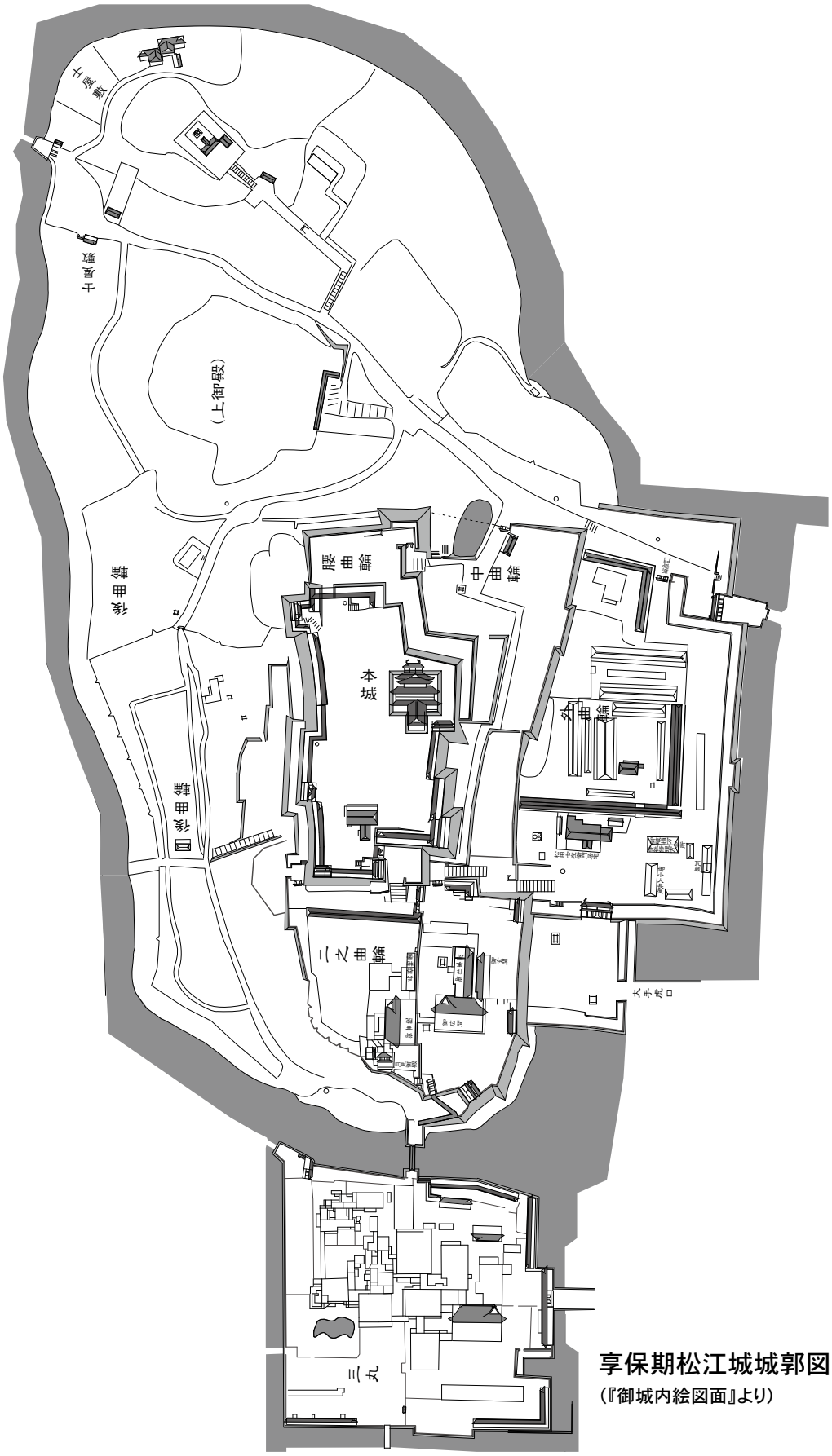
京極期

図２



正保期松江城城郭略図
（『出雲国松江城下絵図』より）

図３



享保期松江城城郭図
（『御城内絵図面』より）

図４